

つて lymphocyte predominance (Lp), germinal center predominance (Gp), lymphocyte depletion (Ld), unstimulated (U) とし、一次リンパ節、二次リンパ節に分けて検討した。

成績：転移(一)群：原発巣の浸潤深度が 6mm までの例では間質リンパ球(卅)が多く、一次節は Lp 以外に Ld もよくみられるが、二次節は Lp のものが多い。

浸潤深度が増加しても一次節、二次節ともに Lp のものが多いが、浸潤25mm を超えると一次節に Ld が増加する。しかし二次節には Lp が多い。また間質リンパ球(卅)の例においてのみ一次節、二次節ともに Lp が多くみられた。転移(十)群：単数転移例では浸潤深度20mm を超えるまでは転移(一)群との間に著差が認められないが、複数転移例では一次節、二次節ともに Ld, Gp が多く、Lp の減少傾向がみられた。なお微小浸潤癌および転移(一)例では間質の IgG の集積が転移(十)例に比較して強かつた。

独創点：微小浸潤癌から進行癌までの担癌個体の免疫反応を間質と一次ならびに二次リンパ節の態度から形態学的に検討した点。

質問 (大阪大) 上田 外幸

間質の IgG と浸潤細胞の種類、或いは癌の種類特に角化型と何か関係がありましたか。

答弁 (大阪医大) 岡崎孝之進

今回の成績では、

- 1) 間質の浸潤細胞と IgG の関係。
- 2) 癌の種類との関係、共にまだわからない。今後検討したいと思います。

6. 子宮頸癌 Ia 期の臨床病理学的検討—とくにその組織基準と Ib 期との境界について

(長崎大) 吉田 茂生, 中島 久良
松本 陽二, 山辺 徹

目的：FIGO の子宮頸癌期別分類では Ia 期の所見を初期間質内浸潤としているだけで、その基準はかなりあいまいである。判定規準としては、浸潤度 3mm (または 5mm) 以内とするもの、最深部頸管腺よりも浅い浸潤とするもの、および浸潤形式を重視するものなどがあり、統一されていない。実際にどのような例が Ia 期あるいは Ib 期に含まれるべきかについて組織学的検討を行つた。

方法：I 期癌202例の診査切除、円錐切除または摘出子宮頸部亜連続標本を作成し、組織学的精査を行つた。

成績 Ia 期と診断されたものは123例で、このうち119

例(96.7%)は 3mm 以内の浸潤であり、浅りの4例は頸管腺侵入部からの微小浸潤であつた。また最深部頸管腺よりも深い浸潤を示すものが3例(3.8%)認められた。一方、組織的に明らかな浸潤癌(Ib 期)は79例であり、このうち11例(13.9%)は 3mm 以内における advanced stromal invasion (Hamperl) と lymphatic vessel permeation の所見を示した。また最深部頸管腺の深さより浅い浸潤を示すものを15例(19.0%)に認めた。すなわち、これらの判別には浸潤度だけでなく、浸潤形式についても考慮すべきであつた。さらに病巣の広がり、占居部位、浸潤開始部位、CPL 分類、腔スミアなどについても比較検討した。

独創点：Ia 期および Ib 期の判定基準に関する統一化が望まれているが、本研究において、組織学的検討からその一つの手がかりを提示した。

質問 (九州大) 杉森 甫

Ia 期の診断について浸潤形式を重視した根拠について、もう少し詳しく説明して下さい。

答弁 (長崎大) 吉田 茂生

Ia 期に対して我々は広汎術でなく縮小手術を行つています。しかし、浸潤の深さだけで割切つて Ia 期を分類しますと、この中に組織学的に advanced cancer と同様な浸潤像(脈管侵襲, confluent invasion)が含まれますので、これに対して縮小手術を行うには疑問が浅る。予後この関係については、これからの検討課題である。

7. 子宮頸部上皮内癌および微小浸潤癌における細胞核 DNA 量と Chromatin 量との相関について

(北海道大) 西谷 巖, 菊地 徳博
守谷 修而, 佐藤 博

子宮頸部 Ia 期癌は、術後障害を伴う広汎全剝除術を避け、縮小手術を行つてもほぼ 100%根治できることが明らかとなり、正確な術前診断が要求されている。しかし、生検組織診は、標的部位をはずす危険もあり、細胞診所見の詳細な検討が必要である。しかし、細胞の Malignancy associated changeなど悪性細胞の Chromatin 構造の変化から悪性度に加えて浸潤の程度まで探る努力がなされる一方、Cervical intraepithelial neoplasia (CIN) は、異型上皮から上皮内癌にわたる spectrum disease であり、段階病変として細胞学的に認識することに疑義も生じている。そこで、これらの病変の細胞核 DNA 量を正確に計量し、さらに Haematoxylin 核質量をも測定して、両者の相関を求めた。